

## 南アルプスの自然破壊に危機感高まる 登山家たちがリニアに疑問

「人は電気がなくとも生きていける。それを疑似体験できるのが登山の魅力。大量の電力を消費し原発を増やすリニアはそれと逆方向」

19歳で南アルプス源流の大井川の沢をすべて登った写真家の志水哲也さんは訴えた。5月20日、リニア中央新幹線による南アルプスの自然破壊について考える集会が東京・渋谷で開かれた。静岡の山岳4団体が昨年9月、静岡県知事に申し入れたのに続き登山家たちがリニアに声を上げ始めた。

黒部川の宇奈月に住む志水さんは「右にも左にも3000メートル級の森林に覆われた山がある川工事が山奥の見えないところで行なわれるのが怖い」と危惧する。水の枯渇は山体の崩壊を招く。大井川の減水をJR東海は毎秒2トンと予想するが、これは日光の華厳の滝の水量に匹敵する。

日本自然保護協会の辻村千尋さんは、リニア実験線の水枯れについて「過去の失敗を活かしていい」と批判。南アルプスは年間4ミリ隆起するというが、「それは何百万年の隆起を平均化したもの。地震でメートル単位で隆起すればどうなるのか。実際東海道線の丹那

大鹿村の現状を訴える前島久美さん（左）。右端は志水哲也さん。（撮影／宗像充）



トンネルの掘削時には地震で2メートルずれて掘りなおしている。人しか運べないリニアに、JR東海の言う大規模災害時のバイパス機能も期待できない」と指摘した。

南アルプス山岳トンネルの長野側の出口にある大鹿村で、植生調査をしながらリニアに声を上げてきた前島久美さん（大鹿の100年先を育む会）は、「赤石山地の中身はわかつていない。だからおもしろい。sense of wonder（自然への好奇心）を次世代に渡していきたい」と地元の価値を認識する地道な活動を紹介。村全体が工事現場になるが「村のリニア対策委員会はJR東海寄り」と危機感を表明。「まず大鹿村に足を運んでほしい」と登山や釣り好きの自然愛好家たちに呼びかけた。

宗像充・ライター